

大学における教養教育

On the General Education in the College Curriculum

講師 鈴木佳秀

（敬和学園大学学長）

大学設置基準の大綱化が発表された1991年以降、ほとんどの国公立大学から教養課程が廃止され、教養部という教員組織も解体された。近年、大学における教養教育の危機が訴えられ、その意義が見直されつつある。だが「教養」の理念や歴史が語られる場合、その言説が、現場で実際に担当した授業内容と必ずしも一致しないというもどかしさがある。教養教育について語るには、自分が経験したことに限定するしかない。一般論では語りえないからである。個人的に経験した教養教育で話が終わってしまうという限界があるが、抽象論で教養教育を論じてあまり意味がない。

新潟大学教養部の教員として迎えられた時は、教養教育の本質もわからずに授業を担当していた。だが教養部が解体された時、どの大学でも、教養教育をどうするのが問われたのである。全学出動体制という名目で、学部教員に担当させようとしたが、教養の授業などできないと拒否する教員が続出する結果となった。狭い限られた専門の授業しか担当してこなかった教員の中には、幅広い視野から学問の本質を語るような講義はできないという者がいて、予想していなかった現実が表面化したのである。教養課程の修了判定を学部任せ、専門科目と教養科目の区別を撤廃したため、結局は、アラカルト方式さながらに学生が自由に科目を選択できるように転換させたのである。いわゆるバイキング方式で自由に科目を履修することが一般化した。教養の習得を学生の自主性に委ねてしまったのである。全学出動という体制は、教育の責任を学生に任せるという無責任体制をもたらした。

この体制が、学部を崩壊させる危機となったのである。大学行政の立場を担うようになって、教養教育の意義を再確認せざるをえなくなった。高等学校で幅広い選択の自由が広まったこともあり、皮肉なことに、大学に入学した学生に補習授業を課さなければならなくなったからである。危機的であったのは、医学部や自然科学系の学部である。例えば、生物を学ばないまま医学部に入学する学生、数学を修得しないまま理学部に入学する学生に、専門の医学の講義や、物理学の専門科目をそのまま取らせることができなくなったのである。現在は、専門教育は大学院に任せ、学部では学士課程教育として専門基礎を教える体制になっている。これこそ学部教育の崩壊に他ならない。すべては、教養課程を廃止し、教員も教養科目も学部へ吸収したことに起因すると思われる。

講演担当者の鈴木は、日本学術振興会主催の人文社会科学振興プロジェクトにおいて、「教養教育の再構築」というプロジェクトに携わり、五年にわたりプロジェクトリーダーとして検証を重ねた。参加した大学教員の所属や専門は多様であったが、「何が教養か」という点で、どの教員も自分独自の教養観を持っており、共通した概念で論議することの難しさを知った。戦後の大学改革がアメリカの Liberal Arts を模倣して出発した時から、「教養教育」についての明確な定義がなかったからである。

プロジェクトでは、教養課程の制度的再構築は無意味であると結論づけた。他方、知識を身につけることだけが教養でなく、あらゆることの基本であるカタを身につけることが、「教養教育」の基盤であるとする点で一致したのである。歌舞伎や相撲、芸術やスポーツの世界では、カタの習得から始め、それを習得した上で、それぞれの個性や能力を展開させるのが常識である。同じ事は、教育や学習の世界にも言える。カタとは、学問の方法であり、論述のカタ、知的な考えカタであり、本の読みカタ、俳句や短歌の詠みカタ、同時に、人間としての生きカタ、道徳のカタ、倫理のカタでもある。カタを学び身につけることが教養の基礎であるとすれば、「教養教育」は、礼儀のカタ、挨拶のカタ、躰、マナーにまで及ぶ全人教育のカタ、人格形成のカタに繋がるはずである。

大学での「教養教育」を考えるなら、優れた概説の授業を必須で履修させることが考えられる。それは基本的な文献や研究史の概要だけでなく、研究者たちがどのように問題に取り組み、どのように解決を導き出したのか、課題設定のカタや解決を導き出したカタ、テキストの読みカタ、実験のカタ、分析のカタ、機材の使いカタ等を学ぶことに繋がる。必要な機会が訪れるならば、そのカタが自然に生きてくるのではないか。カタの習得は、人生の中で求められている真の意味での「教養」に他ならない。

以上のことから、われわれは、次に初等・中等教育における問題に取り組むことにしている。

平成22年6月30日 於 附属図書館ホール

